

# 誰が海外を志向するのか

## —早稲田大学教育学部生への学生調査から—

山本 桃子・遠藤 健・沈 雨香

キーワード：グローバル化、大学教育、海外志向、学生調査、海外留学

**【要 旨】** 近年大学のグローバル化が政策として推進されているなか、大学の制度、教育の改革等の実践はこれまでに多くみられるものの、国内において学生自身の海外に対する意識や、意識の裏にある規定要因などに注目した研究は決して多くはない。

本論は、日本の学生について、マクロあるいはメゾレベルの視点ではなく、どのような属性や意識をもった主体（学生）が移動の意思決定（海外を志向）をするのかというミクロな視点から、大学のグローバル化についてアプローチを試みる。

まず、海外を志向する学生に注目した先行研究の仮説を、早稲田大学教育学部に所属する学生572名を対象に2015年12月に実施された「グローバル社会に必要とされる資質・能力に関する学生意識調査」（以下、グローバル資質調査）のデータを用いて検証する。具体的には、性別、家計、語学、海外経験、学年、リスクの6つの項目について、先行研究で検討された知見をグローバル資質調査の結果から再検討する。

次に、グローバル人材資質を尋ねる指標として、2011年度中小企業産学連携人材育成事業として行われた「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」内の「グローバル人材として必要な資質17項目」（以下、グローバル人材資質）を参照し、学生が大学教育を通して獲得した資質と海外志向との関連を、クロス表を用いて分析する。

結論として、前者の分析では、性別、家計などの生得的属性よりも、行動規範や海外経験などの修得的資質・能力が、海外を志向する意識に関連があることが明らかになった。他方、後者の分析では、異文化理解力、ナショナル・アイデンティティ、英語力を身につけた学生が、長期の海外滞在を希望する傾向が確認された。また、留学、海外旅行、国際貢献活動等、仕事での海外赴任など、海外渡航の目的の違いによって、海外志向と結びつく学生のグローバル資質が異なることが明らかになった。

### 1. 問題の所在

本論は、どのような属性や意識をもった大学生（以下学生）が海外を志向しているのかを早稲田大学の教育学部生を対象にした質問紙調査から明らかにし、現在政策によって推進されている大学のグローバル化<sup>1</sup>を考えるための知見を得ることを目的とする。

近年の大学のグローバル化の発端は、1970年のOECD教育調査団の報告書に確認することができる。報告書「世界参加のための教育（Education for World Participation）」のなかでは、自国のみならず世界の利益のために、積極的な国際参加に貢献をなすための基本的な態度の変革が迫られた（喜多村 1984, p.49-53）。その後、四六答申に続き、臨教審を経てグローバル化が進むなかで、高等教育と学術研究の中心機関としての大学が果たす機能が、強く期待されるようになって

てきている（喜多村 1984, p.63）。

また、2000年代に入ると、産業界から大学へグローバル人材の養成が求められるようになり（吉田 2014）、近年ではグローバル30事業、スーパーグローバル大学創成事業などの大学の国際的競争力を高める事業が展開されている。このように国家レベルの政策誘導によって、各大学レベルにおいて、グローバル社会に対応するための大学や学部の新設、留学制度の整備、教育の環境の整備が行われ（両角 2011）、高度知識人・高技能者による移動の「ゲートウェイ」としての大学の役割（松塚 2016, p.1）は、日本においても高まってきている。

このような大学のグローバル化が推進される背景の一つとして、国家の政策レベルで若者の「内向き志向」が焦点化されたことがあげられる。たとえば、2009年の教育再生懇談会においては、「近年、海外へ行く日本人の留学生・研究者の人数が頭打ちになるなど、若者が『内向き志向』になり、外の世界に積極的に飛び出して行かなくなっているのではないかと懸念される」（教育再生懇談会 2009）と述べられている。

実際、図1に示したように、OECD等の集計によると、確かに2000年代後半の（原則として、交換留学等の短期留学は含まない）日本人留学生の数は減少傾向にある。しかし、学生支援機構（JASSO）の調査（交換留学等の短期留学を含む）によると、近年の留学生の数は増加傾向にある。また、太田（2014）は、一概に若者が心理的に「内向き」であるとは言えず、社会的、経済的、政治的な状況の変化についてはそれほど検証されていないと述べている。

以上のように、大学のグローバル化が政策として推進されているなかで、大学の制度、教育改革等についての考察、実践はこれまで多くみられるものの、学生自身の海外に対する意識や、意識の裏にある要因などに注目した国内の研究は決して多くはない。

一方、海外においては、学生の移動（Student Mobility）の領域において、いくつかの研究の蓄積がある。それらは、国家間の学生の移動について、ボローニャプロセスなどのマクロな動向を分析したもの（たとえば、Gonzales et.al 2011）や、ミクロな動向について調査したものがある。ミクロな動向に注目した研究によれば、たとえば、学生の移動においては、親の留学経験（Van Mol and Timmerman 2014）や友人などの社会関係資本（Haug 2008）が、重要な要因であることが明らかにされている。

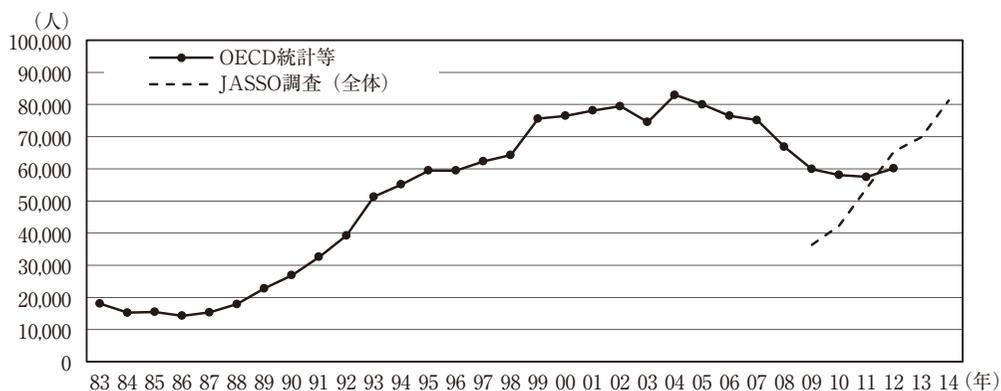


図1 日本人の海外留学状況（文部科学省2016より）

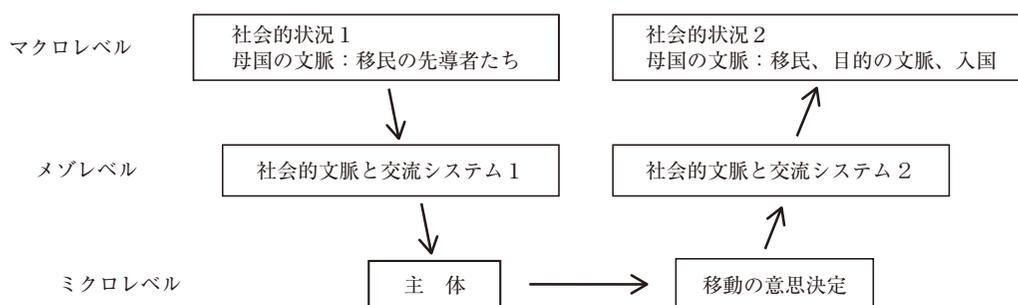


図2 海外移動の意思決定モデルの枠組み (Haug 2008, p. 590をもとに作成)

このような学生の移動の研究におけるマクロからミクロなアプローチについて、Haug (2008) は、図2のように整理している。

Haug (2008) の枠組みに位置づけると、本論は、日本の学生について、マクロあるいは、メゾレベルの視点ではなく、どのような属性や意識をもった主体 (学生) が移動の意思決定 (海外を志向) をするのかというミクロな視点から、大学のグローバル化についてアプローチを試みるものである。

## 2. 検討課題と分析方法

### 2-1. 先行研究と本論の検討課題

本節では、海外を志向する学生に注目した先行研究について整理することを通して、本論で検証する仮説を示していく。具体的には、性別、家計、語学、海外経験、学年、リスクの6つの項目について先行研究で検討された知見の整理を行う。先行研究についての詳述は本論では省略するが、各先行研究から得られている海外志向<sup>ii</sup>と各変数との仮説を表1に示す。

また、本論が用いるデータについては、先述の通り「グローバル資質調査」(2015年)を用いた。「グローバル資質調査」では、学生が大学教育を通してグローバル人材資質を獲得しているかを、自己評価で尋ねた。さらに、調査内ではグローバル人材資質を尋ねる指標として、2011年度中小企業産学連携人材育成事業として行われた「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」内の「グローバル人材として必要な資質17項目」(以下、グローバル人材資質)が参照されているため、本論でもグローバル人材資質をオリジナルの探索的な変数として用いていく。

以上、海外志向に関するこれまでの先行研究の知見を示すことによって、海外志向 (あるいは留学の有無) を促進する、あるいは阻害する要因を整理してきた。続く3章では、仮説ごとに分析を行っていく。ただし、分析の結果にあたっては、早稲田大学教育学部のケースという制約があることには注意されたい。

### 2-2. データと分析方法

本論で用いるデータは、早稲田大学教育総合研究所一般研究部会が早稲田大学教育学部に所属する学生 (教育学専修、教育心理学専修、生涯教育学専修、初等教育学専修) を対象に、2015年

表1 本論で検討する仮説

分類	本論で用いる変数の説明	海外志向に対する予想符号	先行研究・出典
性別	男子(0)、女子(1)	+	竹田 2013、 高松 2015 加藤・久木元 2016
家計	親(現在の生計を主に支えている方)の年収について、以下の7つの順序尺度で尋ねた。①450万円未満、②450万円～750万円、③750万円～950万円、④950万円～1,050万円、⑤1,050万円～1,250万円⑥1,250万円～1,550万円未満、⑦1,550万円以上	+	ベネッセ教育研究開発センター 2012 全国大学生生活協同組合連合会 2016
語学	英語力(どんな状況でも適切なコミュニケーションが出来る素地を備えている英語力(TOEIC730点以上相当))について、大学生活において、どの程度身につけたと思うかを「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の4件法で尋ねた(以下の資質・能力と同様)。この回答のうち「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を合成し「身につかなかった」に、「ややそう思う」と「非常にそう思う」を合成し「身についた」に変換した。	+	ベネッセ教育研究開発センター 2012
海外経験	海外体験(親の仕事の都合、留学、旅行、国際貢献活動、ワーキングホリデー)について尋ねた項目の一つでも2週間以上の経験がある場合を、「海外経験あり」とした。	+	船津・堀田 2004 野口 2009 竹田 2013
学年	1～4年、5年以上	-	竹田 2013
行動規範(リスク)	調査票中の4つの項目(「一般的に、人は信頼できるものだ」「世の中では、人を助ければ今度は自分が困っているときに誰かに助けてもらえる」「旅先や見知らぬ土地で出会う人は信頼できる」「人を助ければ、いずれその人から助けてもらえる」)をもとに作成した合成変数。(人を積極的に信頼する(積極的)、状況に応じて信頼する(流動的)、信頼することに消極的だ(消極的)の3つの尺度にリコード) <sup>iii</sup>	N.S	船津・堀田 2004
資質・能力	経済産業省で提示された17項目 <sup>iv</sup> について、大学生活において、どの程度身につけたと思うかを「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の4件法で尋ねた。この回答のうち「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を合成し「身につかなかった」に、「ややそう思う」と「非常にそう思う」を合成し「身についた」に変換した。	?	経済産業省 2011

表2 グローバル資質調査の記述統計(性別・学年)

		学年					
		1年	2年	3年	4年	5年以上	無回答
男子	285	31.3%	21.8%	23.6%	18.3%	4.9%	0.4%
女子	272	36.2%	16.6%	26.9%	19.2%	1.1%	0.4%
N	557	187	107	140	104	17	2

12月に実施した「グローバル社会に必要とされる資質・能力に関する学生意識調査」(以下、グローバル資質調査)の回答結果である。実際の調査は、各授業に直接調査票を持ち込んだ上、集合調査の方式で実施した<sup>v</sup>。

調査の概要(性別・学年)については、表2に示す通りである。1年生が多いという片寄りが

あるものの、性別による差についてはそれほど見られない。

### 3. 分析

グローバル資質調査の結果からは、一口に海外志向といっても、渡航の目的によって希望する割合が大きく異なることが明らかになった。例えば、海外旅行希望（93.2%）と国際貢献活動等希望（51.6%）には41.6ポイントの差が確認され（表3参照）、学生の海外志向に差が確認された。そこで、以下では、先行研究で着目されている資質の観点から、海外渡航目的ごとにデータを分析し、先行研究の仮説を検証していく。

表3 各海外志向についての記述統計（短期：3か月未満、長期：3か月以上）

内訳	留 学		旅 行		国際貢献		仕 事					
	希望なし	希望あり		希望なし	希望あり		希望なし	希望あり				
		短期	長期		短期	長期		短期	長期	短期	長期	
		24.0%	45.6%		85.0%	8.3%		42.4%	9.2%		28.5%	30.2%
	30.4%	69.6%		6.8%	93.2%		48.4%	51.6%		41.3%	58.7%	
n	546			545			523			533		

#### 3-1. 先行研究で着目されている資質と海外志向

##### i. 性別

竹田（2013）などの先行研究で指摘されてきた「男性よりも女性の方が海外志向の傾向がある」という仮説に対し、グローバル資質調査では、海外志向に男女の顕著な差は見られなかった。海外渡航目的ごとに男女差を見るために、以下「留学」、「海外旅行」、「国際貢献活動」、「仕事での海外赴任」の4つの項目において、「希望無し」、「短期希望（3か月以内）」、「長期希望（3か月以上）」の群に分けて分析した。特に、「留学」と「海外旅行」においては、各1%と5%水準で統計的にも有意であった。

渡航の各項目を見ると、「海外旅行」と「国際貢献活動」においては、「希望無し」と回答した男子が女子をそれぞれ5.2、5.0ポイントずつ上回った（海外旅行：9.4%、国際貢献活動等66.3%）。ただし、「長期希望」に関しては、男子の方が「留学」で7.7ポイント、「海外旅行」1.2ポイント高く、一概に男子よりも女子の方が海外志向であるとは言えない結果となった。

渡航目的ごとに細かく見ると、留学希望は、男子よりも女子のほうが3.1ポイント高かった。ただし、留学を希望する学生のうち、短期と長期の内訳を見ると、短期留学を希望する割合は女子の方が高かった（29.4%）ものの、長期留学では男子のほうが7.7ポイント高かった（49.3%）。このことから、留学希望は男子よりも女子のほうがやや高いものの、男子のほうが長期の留学を希望する割合が高いと言え、留学志向に関しては明確な男女差は見られなかった（図3）。

次に、海外旅行希望は、上述の通り女子のほうが高く9割以上（95.8%）が海外旅行を希望する結果となった。ただし、留学と同様に、女子は短期旅行を希望する割合が非常に高いものの（88.3%）、長期旅行では男子のほうが1.2ポイント高かった（8.7%）。海外旅行に関しては、女子

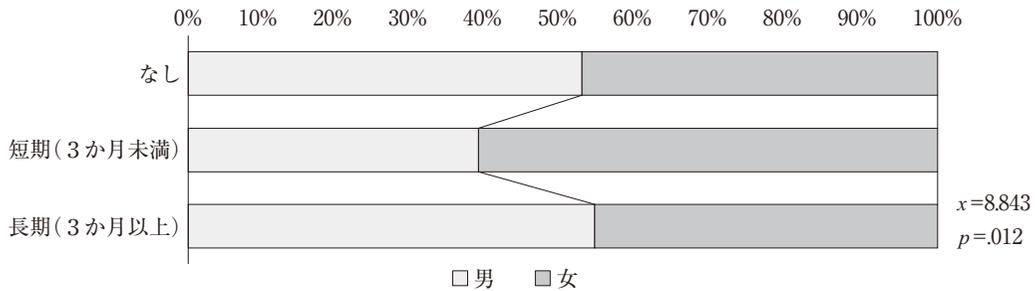


図3 性別と留学期間のクロス表

が男子よりも海外旅行、とくに短期の旅行を希望する傾向が見られた。一方、男子は、海外旅行の希望は9割(90.6%)と女子よりも低かったものの、長期旅行を希望する割合は高く、加えて希望なし(9.4%)と長期旅行希望の割合がやや高い傾向が見られた。

国際貢献活動等の希望では、上述の通り女子のほうが高く、約4割(38.7%)が国際貢献活動等を希望する結果となった。ただし、短期の国際貢献活動等の希望は女子が男子を上回っている(27.7%、5.8ポイント差)が、長期についてはわずかに男子のほうが高い(11.9%、1.0ポイント差)結果となった。

最後に、仕事での海外赴任希望は、男女ともほぼ差は見られなかった(男子58.8%、女子58.1%)。また、海外赴任を希望する期間においては、長期の海外赴任希望が男女共に3割(29.8%、30.2%)で、短期の希望(29.0%、27.9%)よりも若干高い結果となった。ここまで見てきた4つの渡航目的のうち、短期よりも長期の希望のほうが高かった項目は、男女ともに本項目だけであった。

## ii. 家計年収

先行研究によると、「海外留学を阻害する要因は、経済的要因(留学にかかる費用が高大きい)が最も大きい」という知見が多くみられたが、グローバル資質調査においては家庭年収が学生の海外志向を阻害しているという結果は得られなかった。「留学」の希望を見ると、「年収750万円以下」家庭の学生の51.1%が長期留学を希望しており、これは「1,000万円以上」の群の値と全く同値であった(図4)。

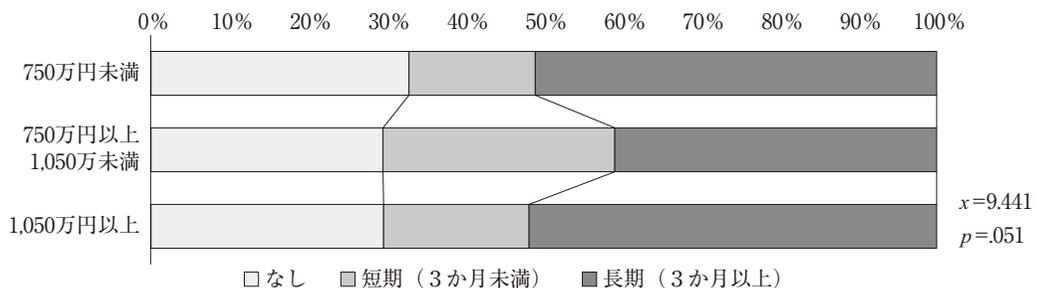


図4 家計年収と留学期間とのクロス表

ただし、「仕事での海外赴任（3カ月以上）」の希望に関しては、「年収750万円以下」群では26.3%だったのに対し、「年収750～1,000万円未満」群では30.1%、「1,000万円以上」群で37.9%と、家庭年収が上がるにつれて長期海外赴任を希望する傾向が見られた。

加えて、父母の学歴でも学生本人の海外渡航希望と明確な相関も見られなかった。したがって父母の学歴が高いほど、高い海外志向を有しているわけではないことが言える。

### iii. 語学

ベネッセ教育研究開発センター（2012）によると、語学力の不足は、家計に次いで2番目に大きい留学の阻害要因であった。グローバル資質調査では、どんな状況でも適切なコミュニケーションが出来る素地を備えている英語力（TOEIC730点相当）を身につけているか否かという項目と、滞在希望期間を含めた海外滞在希望の有無の2つの項目を利用し、語学力と海外志向の関係を確認した。

全回答中、英語力を有していないと答えた学生の37.6%が留学を希望しておらず、英語力を有している学生の29.4%とは約9ポイントの差が見られた。また、英語力を有していると答えた学生の長期留学希望率は58.4%と全体の過半数だったのに対し、英語力を有していない学生の希望は12ポイント低い46.3%であった。5%水準の統計的有意差も確認できており、英語力は留学希望の有無のみならず、滞在期間の違いにも関係していると見て取れる（図5）。

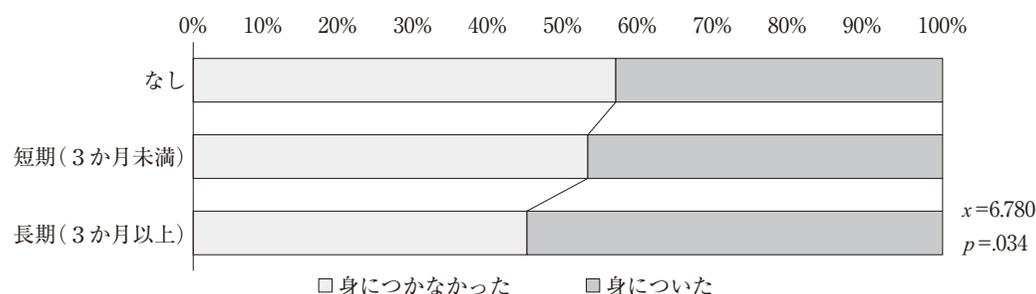


図5 語学力（英語）と留学期間とのクロス表

このほか、海外旅行や仕事での海外渡航の希望の有無については、次節で詳述する。

### iv. 海外経験

先行研究では、「留学経験がある学生は、経験しない層に留学志向が高い」（野口 2009）、「海外留学経験ではなく、海外『旅行』体験が、海外留学志向を高める」（竹田 2013）という知見が提示されていた。グローバル資質調査では、項目ごとに以下のような結果が見られた。

まず、留学希望の項目では、海外経験有と回答した学生の73.9%が今後の留学を希望したのに対し、経験なしと回答した学生の留学希望は58.4%であり、25.5ポイントの差があった。次に海外旅行の項目では、海外経験有の学生のうち96.3%の学生が今後の海外旅行を希望し、経験なしの学生を11.1ポイント上回った。

ただし、国際貢献活動等への参加希望の項目では、今後希望しないと回答した学生の割合は、海外経験有の学生で63.3%、経験なしの学生で63.9%と、これまでの海外経験の有無に関わらずほぼ同値であった。仕事での海外赴任希望については、留学や海外旅行と同様に、海外経験有の学生が63.5%で、経験なしの学生の47.7%よりも15.8ポイント高かった。

#### v. 学 年

「学年が上昇するほど、海外留学への関心は減少する」という竹田（2013）の先行研究結果に対し、グローバル資質調査では学年と海外志向の明確な相関関係は見られなかった。留学希望の項目において、3カ月以上の長期の留学を希望する学生の割合を学年ごとに見ていくと、1年生41.1%、2年生47.1%、3年生43.4%、4年生51.1%と、4年生が最も高い結果となった。

留学同様に、海外旅行、国際貢献活動等、仕事での海外赴任希望についても、学年との明確な負の相関は見られなかった。むしろ、海外赴任希望では、「希望しない」という回答の割合が、1年生52.0%、2年生40.4%、3年生40.3%、4年生27.7%と、学年が上がるほど減っていた（図6）。

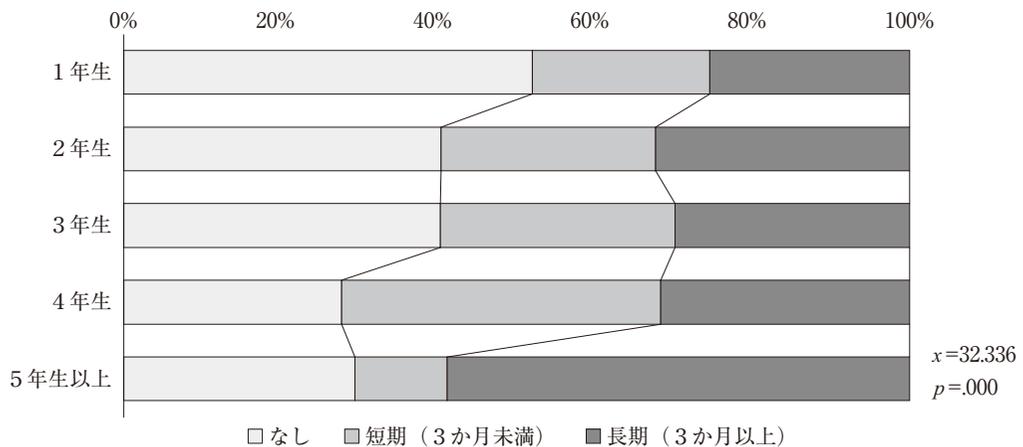


図6 学年と仕事での海外赴任希望のクロス表

この数値をQ14「今後の海外渡航希望」国際貢献活動等の「希望無し」の値と比較すると、学年が上がるごとに、国際貢献活動等での海外渡航を希望する割合と海外赴任で希望する割合との差が広がっている。このことから、国際貢献活動には消極的、海外赴任は積極的な、卒業後のキャリアを見据えた現実的な学生の思考が垣間見えた。また、学年が上がることに、海外赴任を視野に入れたキャリアを視野に入れている学生の意識を確認することができた。

#### vi. 行動規範（他者信頼）

船津・堀田（2004）は、危険回避度の尺度<sup>vi</sup>を用いて留学志向について検討した。具体的には「大学在学中の留学希望には、危険回避度の違いは影響しない」（船津・堀田 2004、p.104）ことを明らかにし、個人の行動規範と留学志向の関係を検討していた。危険回避度は対象者の行動規範を

示す指標であったが、グローバル資質調査では、他人への信頼と海外志向の關係に着目し、他者信頼度と海外希望との相関を確認した（図7）。

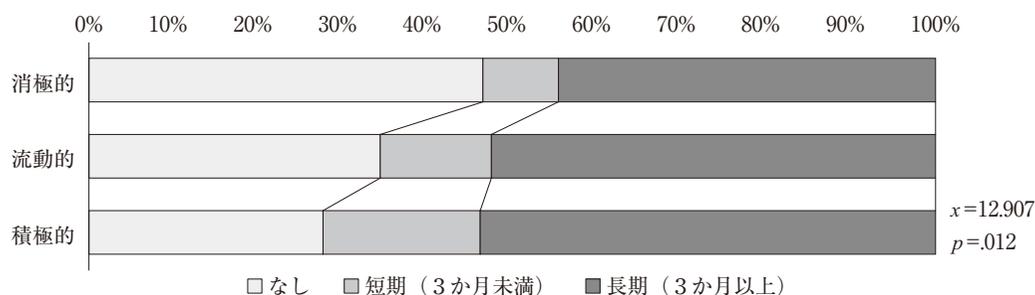


図7 他者信頼度と留学期間とのクロス表

図7が示しているように、他人を信頼することに積極的な学生の方が海外での留学を希望し、とくに長期留学を希望するものが多かった。また、他者信頼度が積極的から流動的、消極的になるにつれて留学を希望しないものが増え、その半面で短期・長期共に留学希望者が減っており、5%水準の統計的有意差も確認できた。

海外旅行と仕事での海外赴任希望の2つの項目では、統計的有意差が見られなかったものの、国際奉仕活動等に関しては、人を信頼することに積極的な学生の方が、そうでない学生に比べ、長期の海外滞在希望を希望していることが分かった。

ここまで、性別や家計年収をはじめとした先行研究で着目されている資質と海外志向について、グローバル資質調査で得られた結果をもとに先行研究で唱えられていた仮説を検証してきた。次に、大学生活のなかで身につけた17項目の資質と海外志向の相関について見ていく。

### 3-2. 学生のグローバル人材資質17項目と海外志向

本節の目的は、学生の今後の海外滞在希望（海外志向）とグローバル資質についての17個の各項目の回答との関連を明らかにすることである。

まず、分析の内容の前に、先行研究におけるグローバル人材資質の位置づけと、グローバル資質調査の質問項目の狙いを述べる。「グローバル人材」に関する定義は諸所あり、その資質に関する定義もまた同様に、先行研究のなかでさまざまに設定されてきた。今回の調査では、大学における教育効果の測定も視野に入れ、前述の社会人として求められるグローバル人材資質を採用した。

本節ではまず、在学中に学生が獲得したグローバル資質（①～⑰）と、海外渡航希望の有無並びに海外渡航希望期間を、クロス表（表4）をもとに確認していく。次に、クロス表の分析結果に関するまとめを述べ、大学でどのような資質が身につけている学生が海外渡航を希望するか、すなわち海外志向を有するのかを考察する。

分析の結果、17項目のうち、3つの項目（異文化理解力・ナショナルアイデンティティ・英語力）

について、身につけたと回答した学生の方が、そうでない学生に比べ留学を希望する特徴が見られたため、以下ではこの3つの項目に限定して分析結果を示す。

#### i. 異文化理解力（他国の社会や文化を異なるものとして積極的に理解・受容・評価する力）

異文化理解力については、「留学」と「国際貢献活動等」と「仕事」の3つの項目で、「身につけた」と答えた学生の方が海外渡航を希望する割合が高く、海外志向が高かった。一方、「海外旅行」の項目では、異文化理解力を身につけた学生とそうでない学生の海外渡行希望の割合が、同値となった。

具体的には、異文化理解力を身につけた学生の海外渡航希望が、「留学」で12.9ポイント、「国際貢献活動等」で11.5ポイント、「仕事」で3.6ポイント、そうでない学生よりも上回った。「留学」と「国際貢献活動等」の項目においては、異文化理解力を身につけた学生とそうでない学生の海外渡航希望で10ポイント以上差があったが、同様の傾向は、3カ月以上の長期の海外渡航希望でも見られており、この差は統計的にも5%水準で有意であった。つまり、大学生活で異文化理解力を身につけた学生の方が「留学」や「国際貢献活動等」を目的とした海外渡航を希望しており、その希望期間も長いことが読み取れる。

3カ月以上の長期の海外渡航希望については、「留学」「海外旅行」「国際貢献活動等」「仕事」の4つすべての項目で、異文化理解力を身につけた学生の方が、海外渡航を希望する割合が高かった。その差は、「留学」で13.4ポイント、「海外旅行」で2.8ポイント、「国際貢献活動等」で11.1ポイント、「仕事」で2.9ポイントであった。

#### ii. ナショナル・アイデンティティ（自国の社会や文化の長短を客観的に認識し、アピールしたり自己批判したりする力）

ナショナル・アイデンティティについては、「留学」「海外旅行」「国際貢献活動等」「仕事」の4つすべての項目で、「身につけた」と答えた学生の方が海外志向が高かった。

ナショナル・アイデンティティが身につけていない学生と渡航目的別の差は、「留学」で10.4ポイント、「海外旅行」で1.4ポイント、「国際貢献活動等」で17.5ポイント、「仕事」で5.7ポイントであった。特に、「留学」と「海外貢献活動等」においては、ナショナル・アイデンティティの有無で10ポイント以上の差が見られ、各5%と1%水準で統計的にも有意であった。

3カ月以上の長期の海外渡航希望について限定して見ても同様に、「留学」「海外旅行」「国際貢献活動等」「仕事」の4つすべての項目でナショナル・アイデンティティを身につけた学生の渡航希望が高く、そうでない学生との差は、「留学」で9.2ポイント、「海外旅行」で3.3ポイント、「国際貢献活動等」で7.1ポイント、「仕事」で7.3ポイントであった。

#### iii. 英語力（どんな状況でも適切なコミュニケーションが出来る素地を備えている（TOEIC730点以上相当））

英語力については、「留学」「海外旅行」「国際貢献活動等」「仕事」の4つすべての項目で、英語力が「身につけた」と答えた学生の方が海外志向が高かった。特に「海外旅行」を除く3つの

項目では、長期の海外滞在を希望する割合に5ポイント以上の差が見られた。その差は、「留学」で10.2ポイント、「国際貢献活動等」で9.6ポイント、「仕事」で7.5ポイントであった。特に、「留学」と「海外貢献活動等」においては、各10%と5%水準で統計的にも有意であった。

海外渡航希望の有無で見ると、4つの項目全てにおいて英語力を身につけた学生の渡航希望の割合が高かった。そうでない学生との差は、「留学」7.6ポイント、「仕事」7.3ポイントで、最も差が大きかった「国際貢献活動等」では11.6ポイント差が見られた一方、「海外旅行」においては0.7ポイントの差が見られるに留まった。

以上のことから、英語力を身につけた学生の方が海外渡航を希望する傾向にあるものの、渡航の内容ごとに見ると、そのポイントの差から、必ずしも英語力が学生の海外渡航を促進・阻害する決定的要因になっているとは言えないと読み取ることができる。

ここまで、在学中に学生が獲得したグローバル資質と海外渡航希望の有無並びに海外渡航希望期間を「留学」「海外旅行」「国際貢献活動等」「仕事」の4つの項目ごとに詳しく見てきた。それをもとに、渡航目的ごとの学生のグローバル資質獲得有無の特徴は、以下のように述べられる。

まず、留学を希望する学生の特徴をみると、17項目のグローバル資質のうち、「異文化理解力」「ナショナル・アイデンティティ」「英語力」の3つの資質について、「身についた」と回答した学生の方が、そうではない学生より留学を希望する傾向が確認された。

資質ごとに詳しく見てみると、異文化理解力を身につけた学生の7割強が留学を希望しており、留学希望期間については長期（50.3%）のほうが短期（23.6%）より多かった。しかし、異文化理解力が身につけていない場合でも留学、さらには長期の留学を希望するものも少なくなかった（36.9%）ことから、一概に「異文化理解力」を身につけた学生ほど留学、長期の留学を希望する傾向にあるとは言えないことがわかった。

「ナショナル・アイデンティティ」についても同様で、身につけた学生の7割強が留学、特に半数（50.0%）の学生が長期留学を希望しており、「ナショナル・アイデンティティ」が身につけていない学生よりも、留学、中でも長期留学を希望する傾向があると、読み取ることができた。

「英語力」については、身につけた学生の7割以上が留学、とくに半数以上（51.6%）の学生が長期の留学を希望しており、「英語力」が身につけていない学生よりも留学を希望する傾向があった。しかし、英語力が身につけていない場合でも留学を希望するものが少なくなく（66.4%）、短期の留学希望については、英語力が身につけていないと回答した学生の方が2.5ポイント高かったことから、一概に「英語力」を身につけた学生ほど留学を希望する傾向にあるとは言えない結果となった。むしろ、英語力が身につけていない場合でも留学希望が多かったことから、語学学習を目的とした留学希望も多く存在している推測できる。したがって、必ずしも英語力が学生の海外渡航を促進・阻害する決定的要因になっているとは言えない、と読み取ることができた。

次に、海外旅行については、17項目全てにおいて統計的有意差が見られなかった。

さらに、国際貢献活動等を希望する学生の特徴をみると、17項目のグローバル資質のうち、「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」「規律性」「異文化理解力」「ナショナル・アイデンティティ」「英語力」の7つの資質について、「身についた」と回答した学生の方が、そうではない学生より留学を希望する傾向が確認された。

表4 グローバル資質17項目×海外渡航希望

グローバル資質17項目	Q14今後の海外留学希望			合計(N)	P	Q14今後の海外旅行希望			合計(N)	P	Q14国際実習活動等			合計(N)	P	Q14仕事での海外赴任希望			合計(N)	P
	なし	短期(3か月未満)	長期(3か月以上)			なし	短期(3か月未満)	長期(3か月以上)			なし	短期(3か月未満)	長期(3か月以上)			なし	短期(3か月未満)	長期(3か月以上)		
①主体性	36.6%	21.4%	42.0%	1000 (112)	N.S.	7.1%	82.1%	10.7%	1000 (112)	N.S.	69.4%	22.5%	8.1%	1000 (111)	N.S.	47.7%	26.1%	26.1%	1000 (111)	N.S.
②働きかけ力	31.5%	27.6%	40.9%	1000 (181)	N.S.	5.5%	87.4%	7.1%	1000 (182)	N.S.	70.1%	22.0%	7.9%	1000 (177)	*	46.9%	22.3%	30.7%	1000 (179)	*
③実行力	31.7%	24.2%	44.2%	1000 (120)	N.S.	7.5%	83.9%	8.6%	1000 (361)	N.S.	60.0%	26.6%	13.4%	1000 (350)	N.S.	38.4%	31.8%	29.8%	1000 (352)	N.S.
④好か心	30.3%	23.9%	45.9%	1000 (423)	N.S.	5.0%	85.0%	10.0%	1000 (120)	N.S.	65.5%	24.1%	10.3%	1000 (116)	N.S.	48.5%	25.6%	35.9%	1000 (417)	N.S.
⑤課題発見力	37.3%	25.5%	37.3%	1000 (102)	N.S.	7.6%	83.8%	8.6%	1000 (105)	N.S.	67.3%	26.7%	5.9%	1000 (101)	N.S.	43.1%	33.3%	23.5%	1000 (102)	N.S.
⑥計画力	29.0%	23.5%	47.5%	1000 (442)	N.S.	6.6%	85.4%	8.0%	1000 (438)	N.S.	62.4%	24.6%	12.9%	1000 (426)	N.S.	40.8%	27.5%	31.7%	1000 (429)	N.S.
⑦創造力	34.8%	20.0%	45.2%	1000 (115)	N.S.	7.6%	84.7%	7.6%	1000 (118)	N.S.	65.2%	23.2%	11.6%	1000 (112)	N.S.	41.2%	27.2%	31.6%	1000 (114)	N.S.
⑧根源的発信力	29.3%	25.1%	45.7%	1000 (427)	N.S.	6.6%	85.1%	8.3%	1000 (423)	N.S.	62.7%	25.7%	11.6%	1000 (413)	N.S.	41.2%	29.2%	29.6%	1000 (415)	N.S.
⑨発信力	33.5%	22.7%	43.8%	1000 (176)	N.S.	7.4%	82.9%	9.7%	1000 (175)	N.S.	65.5%	21.6%	12.9%	1000 (171)	N.S.	41.6%	28.3%	30.1%	1000 (173)	N.S.
⑩傾聴力	31.1%	24.3%	44.6%	1000 (251)	N.S.	6.4%	84.5%	9.2%	1000 (251)	N.S.	69.4%	19.8%	10.7%	1000 (242)	**	42.7%	28.0%	29.3%	1000 (246)	N.S.
⑪柔軟性	29.8%	23.6%	46.6%	1000 (292)	N.S.	7.2%	85.6%	7.2%	1000 (291)	N.S.	58.1%	29.6%	12.3%	1000 (284)	N.S.	39.8%	29.2%	31.0%	1000 (284)	**
⑫状況把握力	34.1%	18.8%	47.1%	1000 (85)	N.S.	8.0%	84.6%	7.4%	1000 (188)	N.S.	69.4%	19.7%	10.9%	1000 (183)	N.S.	47.0%	22.4%	30.6%	1000 (183)	**
⑬異文化理解力	28.9%	25.2%	45.9%	1000 (357)	N.S.	6.2%	85.4%	8.5%	1000 (355)	N.S.	60.2%	27.9%	11.9%	1000 (344)	N.S.	38.2%	31.9%	29.9%	1000 (342)	N.S.
⑭持続力	29.9%	24.5%	45.6%	1000 (421)	N.S.	6.2%	85.4%	8.4%	1000 (419)	N.S.	62.6%	25.2%	12.1%	1000 (404)	N.S.	41.8%	29.7%	28.5%	1000 (407)	N.S.
⑮コミュニケーション力	34.1%	18.8%	47.1%	1000 (85)	N.S.	7.1%	85.9%	7.1%	1000 (85)	N.S.	73.8%	14.3%	11.9%	1000 (84)	**	44.7%	25.9%	29.4%	1000 (85)	N.S.
⑯状況把握力	29.8%	24.8%	45.3%	1000 (459)	N.S.	6.8%	84.9%	8.3%	1000 (458)	N.S.	61.4%	27.1%	11.5%	1000 (443)	**	40.6%	29.1%	30.3%	1000 (446)	N.S.
⑰異文化理解力	36.1%	18.1%	45.8%	1000 (72)	N.S.	8.1%	85.1%	6.8%	1000 (74)	N.S.	62.5%	19.4%	18.1%	1000 (72)	N.S.	38.9%	23.6%	37.5%	1000 (72)	N.S.
⑱状況把握力	29.8%	24.9%	45.3%	1000 (470)	N.S.	6.6%	85.0%	8.4%	1000 (467)	N.S.	63.6%	25.8%	10.6%	1000 (453)	N.S.	41.8%	29.3%	28.9%	1000 (457)	N.S.
⑳異文化理解力	30.7%	17.3%	52.0%	1000 (75)	N.S.	9.1%	83.1%	7.8%	1000 (77)	N.S.	66.2%	21.6%	12.2%	1000 (74)	N.S.	40.5%	21.6%	37.8%	1000 (74)	N.S.
㉑異文化理解力	30.2%	25.1%	44.8%	1000 (467)	N.S.	6.5%	85.3%	8.2%	1000 (464)	N.S.	62.7%	25.7%	11.5%	1000 (451)	N.S.	41.1%	29.9%	29.0%	1000 (455)	N.S.
㉒異文化理解力	29.3%	24.9%	45.8%	1000 (413)	N.S.	7.1%	86.4%	7.6%	1000 (412)	N.S.	75.8%	14.8%	9.4%	1000 (128)	**	42.6%	27.9%	29.5%	1000 (129)	N.S.
㉓異文化理解力	31.9%	24.9%	44.9%	1000 (185)	N.S.	7.0%	86.0%	7.0%	1000 (186)	N.S.	68.7%	20.9%	10.4%	1000 (182)	N.S.	43.7%	23.5%	32.8%	1000 (183)	N.S.
㉔異文化理解力	39.0%	24.1%	36.9%	1000 (187)	**	6.8%	84.4%	8.8%	1000 (353)	N.S.	61.0%	26.7%	12.3%	1000 (341)	N.S.	40.1%	30.8%	29.1%	1000 (344)	N.S.
㉕異文化理解力	25.9%	23.3%	40.8%	1000 (262)	**	6.8%	86.8%	6.3%	1000 (190)	N.S.	71.0%	24.6%	4.4%	1000 (183)	**	43.9%	27.8%	28.3%	1000 (187)	N.S.
㉖異文化理解力	35.9%	23.3%	40.8%	1000 (262)	**	7.5%	86.0%	6.4%	1000 (265)	N.S.	59.5%	25.1%	15.5%	1000 (343)	**	39.9%	28.9%	31.2%	1000 (343)	N.S.
㉗TOEIC 730点以上	25.5%	24.5%	50.0%	1000 (282)	**	6.1%	84.2%	9.7%	1000 (278)	N.S.	72.4%	19.7%	7.9%	1000 (254)	**	44.2%	29.5%	36.4%	1000 (258)	N.S.
㉘TOEIC 730点以上	33.6%	24.9%	41.4%	1000 (321)	*	7.1%	85.4%	7.4%	1000 (323)	N.S.	68.1%	24.3%	7.7%	1000 (313)	**	44.2%	28.7%	27.1%	1000 (317)	N.S.
㉙TOEIC 730点以上	26.0%	22.4%	51.6%	1000 (223)	*	6.4%	84.5%	9.1%	1000 (220)	N.S.	56.5%	26.2%	17.3%	1000 (214)	**	36.9%	28.5%	34.6%	1000 (214)	N.S.

\*  $p < .10$ , \*\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .001$

資質ごとに詳しく見てみると、働きかけ力、創造力について、身につけた学生の方が国際貢献活動等を希望する傾向が確認された（働きかけ力：2.6ポイント差、創造力：11.3ポイント差）。とくに「創造力」を身につけた学生は、そうではない学生よりも短期の国際貢献活動等を希望する割合が高かった（9.8ポイント差）。

また、「傾聴力」「規律性」「ナショナル・アイデンティティ」についても、身につけた学生の方が短期の渡行を希望する傾向が見られた（それぞれ27.1%、28.4%、30.0%）。「規律性（40.7%）」「異文化理解力（40.5%）」「ナショナル・アイデンティティ（45.1%）」「英語力（43.5%）」についても、身につけた学生の方が国際貢献活動等を希望する傾向が見られた。

最後に、仕事での海外赴任を希望する学生の特徴をみてみると、17項目のグローバル資質のうち、「働きかけ力」「根源的発信力」の2つの資質を身につけた学生の方が、仕事での海外赴任を希望する傾向が確認された。

働きかけ力を身につけた学生は、そうではない学生よりも海外赴任を希望する割合が高かった（61.6%、8.5ポイント差）。ただし、働きかけ力が身につけていない場合でも海外赴任、とりわけ長期の海外赴任の希望については少なくなかった（30.7%）ことから、一概に「働きかけ力」を身につけた学生ほど海外赴任を希望する傾向にあるとは言えない。

「根源的発信力」についても同様であり、身につけた学生の方が海外赴任を希望する傾向が見られた（61.8%、8.8ポイント差）ものの、長期の海外赴任については、そうではない学生の希望も少なくなかった（30.6%）。このことから、「根源的発信力」を身につけた学生の方が海外赴任を希望する傾向にあるとは、必ずしも言えないことが明らかになった。

#### 4. 結 論

以上、本論では、どのような属性や意識をもった学生が海外を志向するのかというミクロな観点から、先行研究の知見も踏まえ大学のグローバル化について検討をしてきた。

検証の結果、まず、性別と海外志向の関係については、先行研究（竹田 2013、高松 2015）では男子よりも女子の方が海外志向を持つ傾向が指摘されてきたものの、本論においては明確な男女差は見られなかった。ただし、留学、海外旅行、国際貢献活動等においては、女子の方が希望する割合が高かった。一方、長期の海外渡航希望では男子の方が高かった。女子は短期の海外志向において、男子よりも強いものの、長期の海外志向は女子よりも男子が強い傾向が見られた（図3）。さらに多くの項目（留学、海外旅行、国際貢献活動等）で同様の結果が得られたことから、男子の方が女子よりも在学中の長期の海外渡航に対して抵抗感を抱いていないことが明らかになった<sup>vii</sup>。

次に、家庭年収と海外志向の関係については、先行研究（ベネッセ教育研究開発センター 2012、全国大学生生活協同組合連合会 2016）で留学を阻害する最も大きな要因として挙げられていたものの、本論においては家庭年収と海外志向に明確な相関は見られなかった。ただし、早稲田大学在学学生を対象にした調査票であったため、一般的な学生調査に比べサンプルに偏りがある可能性は否定できない。また、早稲田大学はWaseda150のなかで「全学生留学計画」を掲げるなど大学を上げて留学支援の体制を強化しており、学生が利用できる奨学金の種類も充実している。

このような、他大学にはない豊富な留学関連プログラムの提供によって、早稲田大学特有の結果、すなわち家計年収と留学との関係性があまりみられない結果（図4）になったとも推測できる。

また、いずれの家庭年収の層においても7割が留学を希望していたものの、仕事での長期の海外赴任については、家庭年収が上がるほど長期海外赴任を希望する傾向が見られた。つまり、学生時点での海外志向においては家庭年収との明確な相関は見られなかったものの、社会人になってからの海外志向については、家庭年収が上がるほど海外志向が強い傾向が見られた。

英語力と海外志向の関係については、明確な関連は見られなかった。ただし、留学に限った場合、英語力を獲得した学生の方がより長期の留学を希望していた（図5）ことから、英語力のある学生ほど海外志向が強い傾向にあると言える。海外旅行に関しては、英語力の獲得の有無に関わらず短期を希望する者が多かった。仕事での海外赴任においては、英語力のある学生の方が長期の海外赴任にたいして積極的な結果が得られた。

さらに、過去の海外経験と海外志向の関係については、本論においては一概に海外経験があるほど海外志向が高いとは言えない結果となった。留学と海外旅行に関しては過去に海外経験のある学生の方が経験のない学生より海外志向が高かったものの、国際貢献活動等の希望ではほぼ同値であった。このことから、海外経験の有無は留学や旅行での海外志向に対してはポジティブに働くものの、国際貢献活動等のような海外志向においては影響しないことが明らかになった。

学年と海外志向の相関については、学年と留学に対する負の相関を指摘した先行研究（竹田2013）に対し、本論では学年と海外志向の明確な相関関係は見られなかった。むしろ、仕事での海外赴任においては、学年が上がるごとに希望する割合が増えている（図6）ことから、一概に学年と海外志向を結びつけて述べることはできなかった。

また、他者信頼度と海外志向の関係についても、明確な関連は見られなかった。留学については他人を積極的に信頼する学生ほど留学を希望する結果が得られた（図7）ものの、海外旅行などの他の項目については有意な結果が得られなかった。

ここまで先行研究で着目されていた資質と海外志向の関係を見てきたが、性別、家計収入および親学歴、海外経験、学年、語学力、他者信頼度のいずれにおいても、海外志向と明確な関係は明らかにならなかった。次に、本論で探索的に用いた大学教育の中で獲得したグローバル資質と渡航目的ごとの海外志向の関係を述べる。

留学を希望する学生の特徴では、17項目のグローバル資質のうち「異文化理解力」「ナショナル・アイデンティティ」「英語力」の3つの資質について、身につけた学生の方が、そうではない学生より留学を希望する傾向が確認された。しかし、英語力が身につけていない場合でも留学を希望する学生が少なくなかったことから、語学力習得を目的とした留学希望も多く存在しているという推察が得られた<sup>viii</sup>。

国際貢献活動等を希望する学生の特徴をみると、「働きかけ力」「創造力」「傾聴力」「規律性」「異文化理解力」「ナショナル・アイデンティティ」「英語力」の7つの資質について、身につけた学生の方が国際貢献活動等を希望する傾向が見られた。

仕事での海外赴任を希望する学生の特徴をみると、「働きかけ力」「根源的発信力」の2つの資質について、身につけた学生の方が、そうではない学生より海外赴任を希望する傾向が確認され

た。また、海外旅行については、統計的に有意な結果は得られなかった。

ただし、いずれの資質においても、全て海外志向と正の相関が見られたわけではなく、長期の海外赴任においては前述の資質が身につけていない学生の希望も少なくないなど、渡航期間と資質獲得においては例外も見られたことから、あくまで目安であることは付言しておく。

長期の海外志向を見ると、「異文化理解力」と「ナショナル・アイデンティティ」および「英語力」の3項目を身につけた学生の方が、留学、海外旅行、国際貢献活動等、海外赴任の全項目で、そうではない学生よりも海外希望が高かった。このことから異文化理解力、ナショナル・アイデンティティ、英語力を身につけた学生は、長期の海外渡航希望する傾向にあると言える。

以上のように、留学、海外旅行、国際貢献活動等、仕事での海外赴任などの海外渡航の目的の違いによって、海外志向と結びつく資質が異なることが、本論の分析から明らかになった。

最後に、上記の4つの項目のうち、大学教育や政策レベルで推進されている留学について本論の分析で特徴的だった点を述べる。即ちグローバル社会における大学の教育の環境の整備の観点から示唆を与え、語学力の強化と平行して、異文化理解力やナショナル・アイデンティティを涵養する科目の重要性を指摘する。既に多くの大学で、留学に必要な語学力の取得も視野に入れた外国語科目の充実が図られているが、本論の分析から、「語学力」のほかにも「異文化理解力」「ナショナル・アイデンティティ」が留学に関連する資質であることが明らかになり、このような資質を身につけた学生が留学を希望する傾向が見られた。つまり、留学を促進する大学教育の体制には、外国語スキルの醸成と同様に、他国の社会や文化を異なるものとして積極的に理解・受容・評価する力（異文化理解力<sup>ix</sup>）や「自国の社会や文化の長短を客観的に認識し、アピールしたり自己批判する力（ナショナル・アイデンティティ）」の育成を目指した科目の設置が求められている、という知見が得られた。

## 謝 辞

本論文は、早稲田大学教育総合研究所一般研究部会（B-15）「大学の『グローバル化』に関する研究—学生調査からとらえるその多面性の整理と考察—（代表：吉田文）」（2015–2016年）の研究成果の一部である。調査に協力して下さった関係各所の皆様に厚くお礼を申し上げたい。

## 註

- i 本論では、大学のグローバル化と、国際化を特に区別せずに用いる。
- ii 「海外志向」については先行研究において多様な定義があるが、本論では「海外渡航希望の有無」と「渡航希望期間の長さ」を基準に、海外志向の有無を判断する。
- iii 他者信頼度の内的整合性を表す $\alpha$ 係数は0.985であり、十分に統合に耐ええると判断される。
- iv ①主体性（物事に進んで取り組む力）、②働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）③実行力（目標を設定し確実に行動する力）、④好奇心・チャレンジ精神（新しいことに興味・関心を持ち挑戦する力）、⑤課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、⑥計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかに準備する力）、⑦創造力（新しい価値を生み出す力）、⑧根源的な発信力（自分の意見を伝えることにこだわる力）、⑨コミュニケーションを重視した発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）⑩傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）、⑪柔軟性（意見の違いや立

- 場の違いを理解する力)、⑫状況把握力(自分と周囲の人々や物事の関係性を理解する力)、⑬規律性(社会のルールや人との約束を守る力)、⑭ストレスコントロール力(ストレスの発生源に対応する力)、⑮異文化理解力(他国の社会や文化を異なるものとして積極的に理解・受容・評価する力)⑯ナショナル・アイデンティティ(自国の社会や文化の長短を客観的に認識し、アピールしたり自己批判したりする力)、⑰英語力(どんな状況でも適切なコミュニケーションが出来る素地を備えている英語力(TOEIC730点以上相当))。
- v 早稲田大学は、スーパーグローバル大学創成事業に採択され、本調査は今後大学、学部のグローバル化を推進、検討していく上での基礎的データ・資料になると考えられ企画された。教育学部を対象にするという点については、2012年の中央教育審議会答申(「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」)において、グローバル化への対応として教員を志望する学生の海外留学促進について述べられており、教員養成課程をもつ大学、学部が、どのようにグローバル化に対応していくか重要な課題になると考えられる。本論では分析の対象とはならないものの、教員を志望する学生に焦点をあてた分析は別稿にて論じたい。
- vi 註ii参照。
- vii ただし、仕事での長期海外赴任希望(就職後の海外志向)については、男女ともほぼ同値であったことから、在学中の海外志向に限った知見であることは付言しておく。
- viii 本論から明らかになった根本的な課題として、語学の習得を目的とした語学留学と留学先での高等教育の享受を目的とした単位取得留学を、同じ留学という言葉でひとまとめに表現している現状を指摘しておく。
- ix 吉田文「グローバル社会に必要とされる資質・能力に関する学生意識調査集計報告書」(2016)。

## 参考文献

- ベネッセ教育研究開発センター, 2012, 「第3章 海外留学」『大学データブック2012』.
- 中央教育審議会, 2012, 「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」.
- Gonzalez, C. R., R. Bustillo Mesanza & P. Mariel, 2011, "The Determinants of International Student Mobility Flows: An Empirical Study on the Erasmus Programme, *Higher Education* 62, pp. 413-430.
- Haug, S., 2008, "Migration Networks and Migration Decision-Making", *Journal of Ethnic and Migration Studies*, pp. 585-605.
- 加藤恵津子・久木元真吾, 2016, 『グローバル人材とは誰か—若者の海外体験の意味を問う』青弓社.
- 経済産業省(平成23年度中小企業産学連携人材育成事業:みずほ情報総研株式会社), 2012, 「『大学におけるグローバル人材育成のための指標調査』報告書」.  
<http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/honbun.pdf> (2016年9月26日閲覧).
- 喜多村和之, 1984, 『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』大文堂.
- 教育再生懇談会, 2009, 「これまでの審議のまとめ—第四次報告」.
- 松塚ゆかり, 2016, 「序章 人材国際流動化時代の大学改革—地域比較・事例研究によるアプローチ」  
 松塚ゆかり編『国際流動化時代の高等教育—人と知のモビリティを担う大学』ミネルヴァ書房, pp. 1-19.
- 文部科学省, 2016, 「『日本人の海外留学者数』及び『外国人留学生在籍状況調査』等について」,  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afeldfile/2016/04/08/1345878\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afeldfile/2016/04/08/1345878_1.pdf)  
 (2016年9月24日閲覧).
- 両角亜希子, 2011, 「大学のグローバル人材育成はどこまで進んでいるか」『カレッジマネジメント』(168), pp. 14-24.

- 野口剛, 2009, 「京都大学生における留学志向の三層構造とその規定要因」京都大学国際交流センターアンケート調査班『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起—第3回アンケート・インタビュー調査報告書』, pp.91-104.
- 太田浩, 2014, 「日本人学生の内向き志向に関する一考察：既存のデータによる国際志向性再考」『留学交流』40, pp.1-19.
- 高松里江, 2015, 「第7章 海外に憧れる高校生はだれか—ジェンダーの視点から」中澤渉・藤原翔編著『格差社会の中の高校生—家族・学校・進路選択』勁草書房, pp.115-143.
- 竹田理貴, 2013, 「第7章 日本人学生の国際志向性」横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社, pp.157-178.
- Van Mol C., and Timmerman C., “Should I Stay or Should I Go? An Analysis of the Determinants of Intra-European Student Mobility”, *Population, Space and Place* (20), pp.465-479.
- 早稲田大学教育総合研究所B-15部会（代表 吉田文）, 2016, 「グローバル社会に必要とされる資質・能力に関する学生意識調査 集計報告書」、大学の「グローバル化」に関する研究プロジェクト（早稲田大学教育総合研究所B-15部会）.
- 谷田川ルミ, 2015, 「第4章 海外・留学意識と将来展望」浜島幸司・谷田川ルミ『「内向き」は本当か？—2014年大学生の意識調査～昭和の大学生、平成の大学生』全国大学生生活協同組合連合会, pp.26-32.
- 吉田文, 2014, 「『グローバル人材の育成』と日本の大学教育—議論のローカリズムをめぐって」『教育学研究』81(2), pp.164-175.
- 全国大学生生活協同組合連合会, 2016, 『第51回学生生活実態調査報告』  
(<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> : 2016年9月25日閲覧).